

オペラ鑑賞と生涯学習

—ロシア・オペラを考察して—

鈴木 満由美

日本大学大学院総合社会情報研究科

Opera Appreciation and Lifelong Learning

—An examination of Russian Opera—

SUZUKI Mayumi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this report is to propose the spread of opera appreciation for lifelong learning.

Through opera appreciation one can enjoy music, dance and drama at the same time. Russian history can be learnt through operas such as “Public Igor”. Russia used opera as a policy. The opera “Public Igor” gives us the impression of Russia as a strong nation. Opera is useful for international understanding.

This demonstrates that opera can be used for lifelong learning while enjoying oneself.

1.はじめに

厚生労働省大臣官房統計情報部の発表によれば、平成 19 年の日本人の平均寿命は、男性 79.19 歳、女性 85.99 歳で 83 歳となり、平成 21 年も世界一の長寿を維持した。この長寿化と、IT の技術革新による社会構造の急激な変化などに対処するため、「生涯にわたる学習」の必要性が叫ばれている。

「生涯学習とは、生涯を通じて一定の活動により考え方や行動様式を変容する過程」¹といえる。就学時期の何倍もが生涯学習期間となる。学習の範囲は学校での学習に限らず、文化活動、スポーツ活動、趣味、レクリエーション活動、ボランティア活動とその行動範囲は広い。平成 18 年の教育基本法改正で、生涯学習の理念「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」²という内容も制定された。

平成 18 年社会生活基本調査のうち、生活行動に関する「趣味・娯楽」の部では、CD・テープ・レコードなどによる音楽鑑賞、DVD・ビデオなどによる映

画鑑賞、趣味としての読書、遊園地・動植物園・水族館などの見学、テレビゲーム・パソコンゲームが 10 歳以上の男女のベスト 5 である。表 1 は、中高年の趣味・娯楽の行動率を統計局の資料 4 をもとに作表したものである。子育てが終わり、退職後の余暇の過ごし方の調査を想定して 60-64 歳の男女別の資料に限定にした。

表 1. 趣味・娯楽の種類別行動者率ベスト 8

	60~64 歳の男性	60~64 歳の女性
1	園芸・庭いじりなど	園芸・庭いじりなど
2	趣味としての読書	趣味としての読書
3	日曜大工	CD などの音楽鑑賞
4	CD などの音楽鑑賞	動植物園などの見学
5	カラオケ	美術鑑賞
6	動植物園などの見学	映画鑑賞
7	DVD などの映画鑑賞	演劇・舞踊などの鑑賞
8	スポーツ観覧	編み物・手芸

(統計局「平成 18 年社会生活基本調査第 4 表」より作表)

表1より、男女とも園芸や読書および自宅で音楽鑑賞を楽しむ者が多い。男性はカラオケや自宅で映画鑑賞を好み、女性は美術鑑賞、演劇・舞踊鑑賞、映画鑑賞と鑑賞に行く傾向にある。

その音楽、美術、演劇、舞踊とすべてを一度に鑑賞できる芸術にオペラがある。オペラは音楽を基本に、対話により演じられる演劇の要素をもち、視覚的な舞台効果を得るため絵画の要素も用い、素晴らしい舞踊まで加えた総合芸術だからである。オペラ鑑賞は劇場に行つて鑑賞するだけでなく、DVDなどの普及により自宅で映画鑑賞と同様に楽しめるようになった。

本稿の目的は、生涯学習の一つとして、オペラ鑑賞の普及を提言するものである。そこで、本稿では、オペラを隣国ロシアに絞り研究を試みた。「ロシア・オペラ映画」の放映からロシア史を学び、文化を含む政策をよみとり、ロシア国内外の歌劇場での活動を調査する。そして、歌劇『イーゴリ公』の来日公演の解釈から日ロの外交政策を分析する。オペラは音楽や芝居による物語を楽しむだけではない。その作品から文化や歴史を学び、政治・経済などの国際情勢も感じる国際理解のメディアとして、生涯学習に活用できうることを考察していくものである。

2. 「ロシア・オペラ映画」から学ぶロシア史

冷戦下対策として、自国の偉大さを文化で示す政策の下、ロシアの最高芸術であるオペラを映画化して、全世界に発信した。

2.1 オペラ映画になった歌劇

表2はCS（シアターテレビジョン）で放映された作品を鑑賞して年代順に並べて作表したものである。

オペラはルネサンス後期の16世紀末、フィレンツェで古代ギリシャの演劇を復興しようと始まった。西欧と同様、題材はロシアでも神話や実在人物の英雄伝を取り扱ったものが主流をしめている。○をつけた作品が史実をオペラにしたものである。

これらのオペラ映画は、フルシチョフ（在1953-1964）時代におもに創作された。彼は冷戦を意識し、スターリン批判（1956）を行い、思想・芸術においても統制を雪解け傾向としたからである。

表2. 「ロシア・オペラ映画」

作曲家	曲名	制作
ムーソルグスキイ	ボリース・ゴドゥノフ○	1954
チャイコフスキイ	エフゲニー・オネーギン	1958
ムーソルグスキイ	ホヴァーンシチナ○	1959
チャイコフスキイ	スペードの女王	1960
チャイコフスキイ	イオラーンタ	1963
R=コールサコフ	皇帝の花嫁○	1964
ボロディーン	イーゴリ公○	1969

（CSで放映された作品を表表）

2.2 歌劇『イーゴリ公』から知るロシア中世史

イーゴリ公は実在の人物である。原作は古ロシア英雄叙事詩「イーゴリ公遠征譚」および僧院古文書「イバテフスキー年代記」³による。

キエフ大公国のノヴゴロド・セヴェスキイの領主イーゴリ公は、1185年、東方民族ポーロヴェツ軍との戦いに敗れ、息子とともに捕虜となった。しかし、敵将のコンチャーク汗は公の勇気と同盟を提案しても応じない人柄を気に入り、一族をあげて歓待する。公は単身脱走し故郷の町に帰郷する。ポーロヴェツ族の指導者の汗は娘コンチャーコヴナの改宗を認め、公の息子ヴラディーミルとの結婚を許すという話である。

舞台となるキエフ公国（882-1240）は、「ルーシ原初年代記」によれば、ドニエプル川流域のキエフに最初のルーシの国家を建設したといわれるリューリクの子オレグが建国したのが始まりだとされている。その子孫であるヤロスラフ1世は、1054年に没した際、子どもたちを重要な都市に配置して国家を安定させようとした。しかし、かえって争いが頻発し、ベチェネグ人に代わってポーロヴェツ族の攻撃を受けたのであった。

このため、キエフ公の権威は低下し、リューリクの血をひく諸侯が自律傾向を強めることになり、イーゴリはこの諸侯たちの一人であった。彼らに対して、一致団結してポーロヴェツ軍にあたる政策を強いた。「イーゴリの敵を恐れず戦いをのぞむ」という話は、ロシアの自意識の確立、ナショナリズムの上からも英雄として語りつがれるのは相応しい。

キエフ大公国（ルーシ）は現在のウクライナの首都キエフを中心に存在し、東スラヴ人の国であった。この国は、ウクライナ、ベラルーシ、ロシアの共通の祖とされている。13世紀初頭にモンゴルによって征服され、キプチャク汗の支配下に入った。

2.3 歌劇『皇帝の花嫁』から知る恐慌政治

数多くいるルーシ諸侯のひとりであるモスクワ公イヴァーン3世（1440-1505）はモンゴル・タタール勢力を最終的に駆逐し皇帝を名乗り、ロシア帝国へと発展させた。

その孫にあたるイヴァーン4世（雷帝 1530-1584、在 1547-1584）は東方への領土拡大政策を行った。彼の3番目の皇妃マルファ（1571 没）が結婚後半月で急死した史実に基づくオペラである。その後、毒殺を疑い、強引な粛清や恐怖政治を行った。

2.4 歌劇『ボリス・ゴドゥノフ』の台本も史実

雷帝の死後、息子フョードル1世（1557-1598）が皇帝となった。病弱だったため、彼の妻イリーナの兄ボリス・ゴドゥノフ（1552-1605）が摂政となり実権を握った。

雷帝にはフョードル1世のほか、もう一人息子ドミートリイ（1583-1591）がいた。彼は、雷帝の7番目の妻マリーヤ・ナガノとの間の子で、この当時、「教会法では3回の結婚しか認めておらず」⁴ 戴冠する権利はなかったにもかかわらず、変死したためボリスが暗殺したとの噂が流された。フョードル1世は後継ぎを残さないまま死亡したのでリューリク朝は断絶したため、民衆に選出されたボリスは皇帝（在 1598-1605）となった。彼は即位以前から事実上の統治者として、雷帝の遺志を受けて、「土族の利益を重んじ、農奴制の強化」⁵ に努めた。また、外交的にはスウェーデンと戦い、イヴァンゴロドなどの都市を回復し、バルト海にも進出した。

1602年の秋、ポーランドにドミートリイと名乗る青年が現れた。この頃からスムータ（動乱時代）が始まる。彼は婚約者マリーナ（1588-1614）の父ポーランド貴族イエジー・ムニーシェフの援助のもと、モスクワ在住の反ゴドゥノフ派シューイシキイ公らと結びついた。ゴドゥノフの病死後、戴冠した

皇太子フョードル2世（1589-1605）を処刑して皇帝に即位した。

2.5 スムータを制したロマノフ

そのスムータを終結させたのは、反ゴドゥノフ派の一人ミハイル・フィードロヴィッチ・ロマノフ（1596-1645）であった。彼はロマノフ朝（1613-1917）の初代ツァーリに即位した。

そして、表3は、18代続いた歴代ツァーリを作表したものである。18人のうち大帝といわれるのは、ピョートル1世（1671-1725）とエカチェリーナ2世（1729-1796）の二人だけである。前者は皇帝を名のり、ロシア帝国を成立（1721）させ、後者はヨーロッパの一大強国に発展させたからである。

また、備考の○はオペラの台本のモデルや、オペラの普及に関与したツァーリである。

表3. ロマノフ朝のツァーリー一覧表

	ツァーリ名	在位	備考
1	ミハイル	1613-1645	
2	アレクセイ	1645-1676	
3	フョードル3世	1676-1682	
4	イヴァーン5世	1682-1689	
5	ピョートル1世	1682-1725	○大帝
6	エカチェリーナ1世	1725-1727	
7	ピョートル2世	1727-1730	
8	アーンナ	1730-1740	○
9	イヴァーン6世	1740-1741	
10	エリザヴェータ	1741-1762	○
11	ピョートル3世	1762	
12	エカチェリーナ2世	1762-1796	○大帝
13	バヴェル1世	1796-1801	
14	アレクサンドル1世	1801-1825	
15	ニコライ1世	1825-1855	○
16	アレクサンドル2世	1855-1881	○
17	アレクサンドル3世	1881-1894	
18	ニコライ2世	1894-1917	

（『ロシアを知る事典』の860頁より作表）

2.6 歌劇『ホヴァーンシチナ』の台本も史実

異母姉ソーフィヤ（1657-1704）に、摂政となって実権を握られ、イヴァーン5世と幼いピョートル1世は共同統治させられていた。

成長とともに、分離派教徒と強い結びつきをもつ銃兵隊長ホヴァーンスキイの敗北（1682）、ソーフィヤ派を追放し単独統治を開始した2回目の反乱（1689）、そして3回目の銃兵隊の反乱（1698）でピョートル1世は確固たる統治を手にした。この「三つの重要な歴史的事実を単一の虚構のプロット」⁶に結びつけて、歌劇『ホヴァーンシチナ』は誕生した。

2.7 台本のモデルとなったピョートル1世

また、250人もの大使節団をヨーロッパに派遣し（1797-1798）、自分も身分を隠して一員として参加した。そのエピソードは、ベルギー出身でフランス・コミックにおいて活躍したモデスト・グレットリ（1741-1813）の歌劇『ピョートル大帝（の青春）』で知ることができる。

さらに、オランダやイギリスにおいて、ピョートル自身が船大工見習として造船技術を学んだ逸話は、ドイツの俳優兼作曲家アルベルト・ロルツィング（1801-1851）のオペレッタ『ロシア皇帝と船大工（1837）』にも描かれている。

3.文化政策としてのオペラ

18世紀になっても、オペラはイタリア音楽が最高という意識があり、各地でイタリア人の宮廷楽長が活躍した。

3.1 近代化政策のために輸入されたオペラ

ピョートル大帝の改革はあらゆる種類の西欧の輸入物に扉を開けた。大帝自身は軍楽以外に興味を示さなかった。しかし、サンクトペテルブルグ建都は、ロシア音楽にとって最重要事項であった。

ピョートル大帝の姪アーンナ（1693-1740）、娘のエリザヴェータ（1709-1762）、孫の妃エカテリーナ2世の統治下で、ロシア宮廷は18世紀ヨーロッパの主流に加わっていった。三女帝は、著名なオペラ作曲家をロシア宮廷のおかかえ宮廷楽師長にして、近

代化を意識した外交政策をおこなった。

1735年、フランチェスコ・アラリアがサンクト・ペテルブルクに移住して以来、「パイジェッロ、チマローザ、マルティン・イ・ソレルにいたるまでの傑出したイタリア人音楽家たちを、断りがたいような金銭的報酬」⁷で招いた。ロシア・オペラも西欧と同じように、正統な支配者を讃美し、貴族社会とその価値を表象する役割を果たし、宮廷儀礼において演じられたのであった。

3.2 「官製国民性」政策の中の国産第一号

ニコライ1世（1796-1855）に対する忠誠と服従は神と愛と不可分であり、国民感情と愛国心を同一視し、「正統な皇帝のすべての臣民が純粋で単一のロシア国民を構成」⁸しているというイデオロギーをもっていた。これは、少数民族の強制的ロシア化と他の民族を犠牲にした国家拡張の政策そのものであった。

ロシア音楽の父と見なされてきたミハール・グリーンカ（1804-1857）は、イタリアとドイツにおいて音楽を学び帰国後、アレクサンドル2世（1818-1881）の皇太子時代の秘書官だったローゼン男爵に依頼され、1836年にロシア人で初の歌劇『皇帝にささげた命』を創作した。この作品はポーランド人からロシアを奪回しロマノフ王朝が成立した当時を描いたオペラである。「国家の繁栄なくして個人の幸福はない」⁹というメッセージを発している。

1843年、皇帝の外交的な決断として、「ヨーロッパでの威信を得るための投資として、ボリショイ・カーメンヌイ劇場（石の大劇場）にイタリア・オペラ団を創設」¹⁰した。ニコライ1世の時代のオペラは帝室の意向に沿って、西欧を意識した近代化のための道具として成立していたのであった。

3.3 量産された「国民的才能を支援」する政策

アレクサンドル2世は、東方への領土拡張を目標に帝国主義を讃美した。日本との樺太・千島交換条約（1875）を締結したのも彼である。文化において、「国民的才能を支援」する政策をとり、1859年にロシア音楽協会を設立した。その目的は「ロシアにおける音楽教育と音楽的嗜好の発展、そして自国の人

材の奨励」¹¹であった。

1859年に火災で焼失したサーカス劇場の跡地に、火災に遭遇したマリイーンスキイ劇場を1860年にオープンさせた。この劇場はアレクサンドル3世(1845-1894)の皇后マリア・フィードロヴナの名前に因んで命名された帝室劇場である。

この政策に反応し、ロシア・オペラの大部分がこの時期に創作された。西欧のアカデミックな教育を受けた者と、経験的な訓練を重要視した国民楽派に大別される。

前者は、西欧で成功していたピアニストのアントーン・ルビンシテーイン(1829-1894)のサンクトペテルブルグ音楽院を創設(1866)と、弟のニコライ・ルビンシテーイン(1835-1881)のモスクワ音楽院の開校による。大公妃エレナ・パーヴロヴナの援助もあった。多くの音楽家を輩出した。ピョートル・チャイコフスキイ(1840-1893)もこの音楽院の出身者である。

後者は、帝室宮廷礼拝堂に所属していた作曲家兼ピアニスト兼指揮者であるミーリイ・バラキーエフ(1837-1910)のもとに集まった。歌劇『イーゴリ公』の作曲者アレクサンドル・ボロディー(1833-1887)、官吏技師のツエーザリ・キューイ(1835-1918)、歌劇『ボリース・ゴドゥノーフ』を創作したモデースト・ムーソルグスキイ(1839-1881)、ペテルブルグ音楽院の教官になったリームスキイ＝コールサコフ(1844-1908)で、国民楽派五人組という。

3.4 専制讃美に利用した帝政末期

アレクサンドル3世の時代の帝室劇場は「ロシア皇帝の私財で成り立っていた劇場」¹²であり、規定事項以外のことをする場合は皇帝の許可を得る必要があった。そのため、歌劇『ボリース・ゴドゥノーフ』の上演は政治的な理由から非合法化され、上演演目から削除されてしまった。

ニコライ2世(1868-1918)は、歌劇『ボリース・ゴドゥノーフ』の最終幕の場面を入れ替えさせて上演を許可した。そのため、ボリースの死で終わり、「ムーソルグスキイの演出では民衆はボリースの皇帝への即位には冷淡で、興味を示さないが、リームスキイ＝コールサコフの戴冠式の儀式は専制への平

和な讃美」¹³となったのである。

1908年、ボリース役のバスの名優シャリヤーピンを擁し、ロシア宮廷から支援をうけて、ディヤーギレフは、大国ロシアの威信を表現して、パリ興業を成功させた。この公演は、「日露戦争での大敗と1905年の革命によって失った面子を回復」¹⁴するための外交的な目的に利用され、文化の高さを西欧にしらしめたのであった。

3.5 組織の中のレーニン・スターリン時代

1923年、政治的団体ともいえるロシア・プロレタリア音楽家協会(RARM)が設立され、プロパガンダ活動も行われた。各音楽院まで共産党中央委員会のプロレタリア組織に影響を受けたのである。「革命以前の一般大衆は、芸術とはほど遠い所で生活していたので、芸術に対する知識を全然持っていない」¹⁵状態だったので、オペラの創作にかわり、大衆の観客を動員できる劇音楽や映画音楽へと移行していった。

4. ロシア国内外の歌劇場での活動

フランシス・マースの先行研究をもとに、オペラからロマノフ朝を頂点にした政治絡みのロシア史を検証することができた。

4.1 自由化政策の中でのロシア・オペラ

1986年にゴルバチョフ書記長がペレストロイカ政策を打ち出し、民衆化、グラスノスチ(情報公開)を盛んに訴えた。翌年、芸術にも検閲が廃止され、「ロシア音楽家が海外で公演することも、外国の名演奏家がソ連邦の国内で演奏することを厳しく制限されていた」¹⁶時代と異なり表現の自由を与えられた。ロシアになって以降、日本でもロシア・オペラが鑑賞できるようになった。

4.2. 来日した劇場

マリイーンスキイ劇場は、7回(1993・1996・2000・2002・2003・2006・2008)来日している。ロシアものが12作品ととても多い。

ミハイロフスキイ劇場は、4回(2003・2005・2007・2009)、各年に来日している。管弦楽団、合唱団、バ

レエ団を引き連れて大都市巡演を行っている。

ボリショイ劇場は、2回（1995・2009）来日した。その他、ボリショイ劇場（在 1943-1963）でオペラ演出にあっていたボリス・ポクロフスキイ（1912-）が1971年に創設した国立モスクワ室内歌劇場も6回来日している。

4.3 ロシア文化フェスティバル

2003年1月にプーチン大統領と小泉首相による日ロ首脳会談によって締結された「日露行動計画」に基づき、日露国交回復50周年を記念して「ロシアにおける日本文化フェスティバル2003」が開催された。「日本におけるロシア文化フェスティバル」はその返礼による。

それは2005年11月の日露首脳会談で、日ロ修好150周年を祈念して「日露間の人的交流について今後3倍増、約40万人を目指す」¹⁷という目標を掲げ、その中の一つに文化交流という芸術政策があったのである。

この「日本におけるロシア文化フェスティバル」は2006年から3年間を主に対象としていた。日本側は小泉純一郎総理、ロシア側はプーチン大統領の挨拶で始まった国家プロジェクトである。プーチンの挨拶によると、日本でよく知られたロシア文学、演劇、映画、絵画、バレエ、そして音楽の古典的な作品を楽しむとともに、現代ロシアの芸術的成果に触れ、親善友好関係の強化と両国関係の多面的な発展を期待したものであるという。

実際の運営にあたる日本組織委員会会長は、首相就任前日まで日ロ協会会長だった鳩山由紀夫が務めていた。現在の会長は弟の鳩山邦夫に引き継がれている。この事業は、2009年も延長された。

4.4 期間中の上演と演目

マリイーンスキイ劇場は2回来日した。2006年1月は、オープニングとして小泉首相の好きなヴァーグナーの歌劇『ニーベルングの指環』の4部作を上演した。2008年1月は、『ホヴァーンシチナ（シヨスタコーヴィチ版）』、プロコーフィエルの『三つのオレンジへの恋』、『イーゴリ公』とロシアの作曲家の作品を中心に、フランス国王に捧げたロッシーニ

の『ランスへの旅』と強いロシアを意識した選曲であった。

ミハイロフスキイ劇場は隔年12月に来日して全国巡演するので、日本ではレニングラード国立歌劇場として知られている。2005年はヴェルディの『椿姫』とグノーの『ファウスト』、2007年はビゼーの『カルメン』と『イーゴリ公』を上演した。2009年はプッチーニの『トスカ』とチャイコフスキイの『エフゲニー・オネーギン』の予定である。

ボリショイ・オペラが14年ぶりに2009年6月に来日した。演目はチャイコフスキイの『スペードの女王』と『エフゲニー・オネーギン』であった。

4.5 ロシアでの現地公演の事情

日ロ首脳会談の重要目標である人的3倍増の面から、観光産業として、JTBの広告会社であるJICの「オペラ公演予定」から調べた。そのスケジュール表から作表したのが表4である。

表4. オペラとバレエの上演回数

	ボリショイ		モスクワ音楽		マリイーンスキイ		ミハイロフスキイ	
	オペラ	バレエ	オペラ	バレエ	オペラ	バレエ	オペラ	バレエ
9月	0	0	2	1	7	8	0	0
10月	8	11	12	5	11	11	9	11
11月	9	17	12	11	17	11	9	12
12月	14	9	7	0	11	13	7	10
1月	16	7	13	7	14	20	13	1
2月	7	15	7	5	14	9	9	9
3月	16	15	7	7	11	18	6	8
4月	3	12	7	8	14	10	5	10
5月	13	15	11	8	9	18	6	12
6月	8	7	8	7	11	16	8	13
7月	2	6	10	4	7	13	1	8
合計	95	114	96	63	126	147	73	94

（2007～08年、JICを参考に作表）

社団法人『日本演奏連盟』の発行している月刊クラシック音楽情報誌に『ぶらあぼ』がある。その書面に、主要オペラハウスの海外公演情報のコーナーがある。そこには、ロシアや旧ソ連の情報は記載さ

れていない。ヨーロッパにおいてはドイツとイタリアの各都市、ウィーン、パリ、ロンドン、アムステルダムにある劇場が中心となっている。ロシア・オペラは音楽専門家たちの間でも、日本では馴染みの少ないオペラなのである。

JIC からの調査なので、観光に行く目的であるモスクワとサンクトペテルブルグの2つの地域の歌劇場に絞ってあった。オペラシーズンは9月下旬から翌年の7月上旬までである。

通常、オペラとバレエとは同じ劇場で隔日ごと交互に上演を行う場合が多い。ボリショイ劇場とモスクワ音楽劇場はモスクワにあり、マリイーンスキイ劇場とミハイロフスキイ劇場はサンクトペテルブルグにある。

レパトリー数において、マリイーンスキイ劇場は群を抜いており、他の3劇場の3倍ほどもっていた。ボリショイ劇場の来日演目である『スピードの女王』と『エフゲニー・オネーギン』は4劇場ともよく上演していた。ボリショイ劇場はロシアの作品をよく上演する。他の3劇場は他国の作品の上演が多い。マリイーンスキイ劇場はボリショイ劇場以上にロシアものも強い。

この調査と来日演目より、マリイーンスキイ劇場の場合、新演出の『ランスへの旅』以外は本国でも上演していた。ミハイロフスキイ劇場の場合、『椿姫』は毎月上演する得意演目であるのに対し、『イーゴリ公』はこのシーズンにおいて日本以外では上演されなかった。

4.6 日ロ間の歴史とロシア文化フェスティバル

日ロ協会、すなわちロシアと鳩山家の関係は深い。1853年にロシア使節プチャーチンが長崎に来て、1858年、ついに日露修好通商条約を結ぶ。1875年、ロシアと樺太・千島交換条約を結び領土が確定する。1904年に日露戦争がおこり、翌年、ポーツマス条約を締結し、南樺太（サハリン）が日本の領土になった。1914年に第一次世界大戦に参戦し、1918年からシベリア出兵を行った。1941年に日ソ中立条約を結び、太平洋戦争に突入した。しかし、ポツダム宣言受託の直前に、ソ連が日本に宣戦し満州に侵入し、北方領土を占領した。

1956年、鳩山一郎首相は日ソ共同宣言においてソ連との国交を回復させ、国際連合に加盟することができた。翌年には日ソ通商条約も調印し、ものの流通も可能となった。「ポツダム宣言第8項後段の規定によって日本に南サハリンと千島列島を放棄させることとし、日本はこれを受け入れた。この際、千島列島の範囲が問題となったが、それは、歯舞諸島、色丹島だけは千島列島から除いて日本領と認めるという考えが連合国にあったため」¹⁸と和田春樹は記している。

「ロシア文化フェスティバル」は、日露修好150周年、日ソ共同宣言から50年、日ロ国交回復50周年を記念した催しである。貿易は順調であっても、隣国として未だ領土問題が解決できず政治問題として残っている。

北方領土は我が国では日本固有の領土とされている。一番近い貝殻島は納沙布岬から約3.7kmしか離れておらず、我が国の領海とされている12海里（約22km）以内に位置する。しかし、この付近の海域は、許可を得てロシア側に入漁料を払った漁船のみが民間の日露間協定で、昆布や許可された漁について漁を認められるにすぎない複雑な地域である。

首相になった鳩山由紀夫は国連加盟をめざし苦渋の日ソ共同宣言を締結した一郎の孫である。日ロ双方の温度差はあるけれど、領土問題の進展が望まれるのである。

5. 歌劇『イーゴリ公』から分析する日ロ関係

「ロシア文化フェスティバル」期間中に、歌劇『イーゴリ公』を2劇団が上演した。この歌劇の演出に焦点をあてて検証してみる。

5.1 歌劇『イーゴリ公』の来日公演は5回

ミハイロフスキイ劇場 2007年日本公演のリーフレットによると、歌劇『イーゴリ公』は、NHK放送開始40周年を記念してザグレブ国立歌劇場合唱団とともに来日したスラヴ・オペラ（1965）が日本初演である。その後、ボリショイ・オペラが、大阪万国博覧会の記念公演（1970）とポクロフスキイの演出（1995）で来日した。

1996年、「外務省の中の〈重厚的アプローチ〉が

打ち出され、＜政経不可分＞路線は破棄¹⁹されてしまった。そして、ミハイロフスキイ劇場（2007.12）とマリイーンスキイ劇場（2008.2）の来日公演は、好調な経済により、大国としての自信を取り戻した時期の選曲であった。

専制讃美に利用するため『ボリース・ゴドゥノフ』は楽譜を変え、構成を変えた歴史があった。今回の『イーゴリ公』の来日公演も構成が変わっていた。

5.2 マリイーンスキイの構成からみるメッセージ

イーゴリ公の出陣式のプロローグから始まる。3601席のNHKホールにおいて3日間上演させた。本物の馬が上がる絢爛豪華な舞台に仕上げている。構成は、「2007年ゲルギエフ改訂版による演出で、プロローグと4幕の構成」²⁰で、休憩30分を挟み200分の上演であった。

第1幕はポーロヴェツ軍の陣営の場でコンチャーク汗がイーゴリをもてなす。本来の2幕である。最後にミハイル・フォーキン（1880-1942）の振り付けによる「ポーロヴェツの踊り」で終わり、ダイナミックなジャンプは余韻を残す。休憩後、第2幕で捕虜イーゴリの脱走、第3幕で妻ヤロスラヴナが悲しみを歌い、本来の1幕1場の義弟ガーリツキイ公の悪政へと続く。第4幕は妻の部屋で帰還したイーゴリとの再会を喜び、来襲に備えてイーゴリを大将に結集し歓呼のうちに幕が下がる。

かつての演出は、捕虜になっても、国や民のために脱走してまでも再起をはかる、ナショナリズムの高揚に利用されるオペラだった。しかし、今回の演出では、火の海になったはずの町を陥落させなかった。このことは、自衛のために戦闘をするというロシアの正当性を主張している。

5.3 ミハイロフスキイの構成からみるメッセージ

2296席の中京大学文化市民会館オーロラホール、2700席の大阪フェスティバルホール、1354席の武蔵野市民会館、2150席のオーチャードホール、2303席の文化会館で5日間上演された。シンプルなセットと衣装によるコストパフォーマンスの演出によって、ロシア・オペラの雰囲気表現していた。プロ

ローグと2幕4場に編成し直し、休憩20分を挟み、175分の上演で構成である。

イーゴリ公の出陣式のプロローグから始まる。第1幕は義弟の悪政と妻の心配で、本来の姿である。休憩後、第2幕はポーロヴェツ軍の陣営で腰をかがめて踊るゴレイゾフスキイ（1892-1970）の振付による「ポーロヴェツの踊り」でもてなす。脱走の場面を含む本来の第3幕はなくイーゴリは帰還し、歓喜で迎えられる。

第3幕をカットしたため、イーゴリの息子を誘惑する汗の娘の戦略は感じられない。捕虜であっても恋こがられる優秀で素敵なロシア人を際立たせ、強いロシアを強調する。

5.4 バレエ「ポーロヴェツの踊り」の効果

両劇場の演出とも「ポーロヴェツの踊り」は迫力があり、印象に残る。ロシアでは物語性をもった舞踏劇、ロマンティック・バレエが踊り続けられている。ロシア語は世界共通語ではない。バレエは歌詞や台詞を伴わず身体で表現するので、言葉がわからなくとも全世界の不特定多数の人々に向けて視覚で訴えることができる。

「受動的な東洋人たちはロシア人の決断力の好敵手にはなり得ないという概念」²¹はロシアでは公然と表現される。すなわち、音楽表現において「ロシア的旋律は積極的で、明るく、合理的に提示され、東洋的旋律は受動的で、官能的で、快楽的」²²として描かれているのである。

サンクトペテルブルグに住むロシア人はパリなどの西欧諸国と同様の文化を感じていた。ソ連の支配者たちはプロパガンダのため、「ロシアの作曲家たちをあらゆる諸民族の友愛の伝統者として提示」²³しようとした。最もオリエンタリズム的な作品がこの歌劇『イーゴリ公』であった。有名なこの「ポーロヴェツ（韃靼人）の踊り」はオリエンタリズムのイデオロギー的内容を暴露し、政治上利用されたのである。

汗は「西洋の男性の理性や気力をそぐ恐れのある、独裁やエロティシズム、官能的誘惑」²⁴といった東洋的テーマを利用して同盟に引き込もうとする。東洋への軍事的攻勢を合理化するイデオロギーの古典的

な例、つまり、東洋諸民族に対する西洋の優越性の理論であり、ロシアに東洋を征服する権利を与えているのである。

5.5 声質からのメッセージ

声はその人のもっているキャラクターをも暗黙の了解で設定する。

オペラの役柄は声域や声質によって決まる。通常、声域は女声の場合、ソプラノ、メゾ・ソプラノ、アルト、男声の場合はテノール、バリトン、バスに大別される。声質とは、ソプラノやテノールといった同じ声域の中の軽重や柔硬などの声の質をいう。

声帯は背の高さに比例する場合が多く、声の低い男性は大柄な人が多い。

イーゴリ公はバリトンである。やや低めの力強いゆっくりしたテンポで朗々と歌いあげる場面は、信頼のおける支配者そのものである。現在は劣勢でも将来は勝利を暗示しているように感じさせる。それに対し、コンチャーク汗はバスであり、ロシアを脅かす悪役として描かれている。

汗の娘のコンチャークコヴァはそのツールとして、「不可決な半音階的経過音や低音のオスティナート音型」²⁵を用いている。善良で無気力なイーゴリの息子ヴラディーミルのテノールの声部に絶えずまとわりつく、誘惑するメゾ・ソプラノそのものである。

弟ガーリツキイの治世は無秩序で悪役なのでバス、ヤロスラヴナは戦地に行った夫を心配する妻を演じるのでレヅジャロ・ソプラノの声質である。オヴルーは自分を雇ってくれている汗を裏切ってまで、イーゴリの逃亡を助けるので、ロシアにとって善良な人ということでテノールとなっている。

この配役から、イーゴリを中心にした考え方、ロシアの繁栄を願った物語であることがわかる。戦闘に強いポーロヴェツの民、これを経済に先行した東洋の日本に置き換え、日ロ関係も「正義はロシアである」と発信しているかのように感じさせる。

5.6 オペラからの発信と識者の意見

ロシアには、民間テレビ局「独立テレビ (NTV)」、半官半民の「ロシア公共テレビ (ORT)」と国営の「ロシアテレビ (RTR)」という全国三大ネットが存在し

ていた。プーチン首相は大統領時代に、三大ネットを掌中におさめ、「強いロシアの指導者」を内外に印象づけるのに成功した。

専門家は別として、一般大衆は知識をテレビや新聞、インターネットなどのマスメディアから情報入手することが多い。もし、すべてのメディアが究極において治世者のものであれば、トップの者がお触れを出さなくても、同じ傾向で情報は発信されるので、人々はその方向に進む。すなわち、無意識の中で洗脳されてしまうわけである。オペラは興業であるので、成功するためには人々の好みや時流に敏感にならざるを得ない。

1999年以降、ロシア経済は7%の経済成長率を示し、大きく成長している。日本の主要輸出品目(2007)は乗用車(68%)が中心であり、主要輸入品目(2006)は鉱物性燃料(42%)と非鉄金属(30%)である。資源を握られては、対等な外交をするのは難しい。メドベージェフ大統領もプーチン首相も、北方領土に関心をもつ。プーチンは「平和条約締結後に歯舞、色丹を日本に引き渡す」とした1956年の日ソ共同宣言を重要視している。

歌劇『イーゴリ公』を演目に選んだだけで、鑑賞した人の脳裡にオリエンタリズムのあのメロディー「ポーロヴェツの踊り」をうえつける。アリアの部分の聴覚、バレエの部分の視覚に訴えて、無意識のうちに、積極的なロシア、消極的な日本を演出する。ロシアペースで外交政策を進め、日本から譲歩を引き出せば、ロシアは成功したことになる。戦略として利用することのできるオペラなのである。

ロシア人は本来自分たちが最も優れていると思いきみ、経済分野においても安全の確保と国益の擁護は国家の政策の最重要事項だと考えている。対外政策に関して、法や規範より力を重んじる傾向をロシアの歴史は示してきた。すなわち、「相手の国がどれくらい隙を見せるか、どのくらい抵抗するか、どのくらい成功のチャンスがあるかを計算して、進出するか否かを決定する傾向が強い」²⁶のである。

袴田茂樹・青山学院大学教授は、先端技術を活用した国家経済の近代化を進めた日本のノウハウを対日関係でロシアは「再発見」しつつあると見た。しかし、「大国主義的なナショナリズムが高揚しており、

北方領土問題をすぐ解決できる状態にはない」²⁷と述べている。また、「政府の本格的な対露経済協力は領土問題の解決なしには不可能であることを常にロシア側に想起させる必要がある」²⁸と解説している。

多くの学者がロシア人気質を理解した上で、交渉すべきであると交渉過程の難しさを説いている。今回検証した日本公演での『イーゴリ公』からのメッセージは、学問上立証を試みた袴田茂樹の分析と一致した。このように、オペラは政治、とくに政策や戦略も感じさせるのである。

6. オペラ鑑賞の方向性

ロシア・オペラはロマノフ朝とともに発展してきた歴史がある。

6.1 多額の費用がかかるオペラ上演

オペラを上演するには、企画・立案、舞台の設営、そして出演する人たちがいる。

出演する人たちは、劇場専属のオーケストラ、合唱団、バレエ団とソロ歌手及び指揮者である。この人たちが上演するために、大道具係・小道具係・衣裳係・メイク係などの舞台設営や合唱指揮者・練習ピアニストなどの音楽をまとめるスタッフが必要である。そして、照明家、美術家、振付家などの専門家と彼らをまとめる演出家と、音楽監督や公演全体の最高責任者である総監督がいる。新作の場合は、さらに台本や作曲家も必要である。

このように人件費のほか、舞台装置、輸送費など多額の費用がかかる。そのため、オペラ公演には上演を支援し、経済的に援助してくれる人が必要なのである。ロマノフ朝時代は皇帝や貴族であった。

6.2 「聞くオペラ」から「考えるオペラ」へ

現在でも費用がかかるのは同様である。オペラ大国である欧州の歌劇場でも補助金なしでは運営が難しい。採算と芸術をどう両立させるのが課題となっている。そのため、「演出を簡素にする代わりに社会・政治批判を盛り込んで観客に訴えるのが欧州北部では主流」²⁹になりつつある。

オペラ公演をするには、後援の外務省・文化庁・各大使館はもとより、協賛してくれる企業を大切に

する。世界的な景気減速は、ますます、政治や経済と結びつき、「聞くオペラ」から「考えさせるオペラ」へとになっていく傾向がある。

6.3 オペラ映画やライブ映像オペラの楽しみ

本稿では、ロシア史を学ぶために史実を台本にした歌劇『イーゴリ公』、『皇帝の花嫁』、『ボリース・ゴドゥノフ』、『ホヴァーンシチナ』のオペラ映画4曲を活用した。そのあらすじからロシア中世史の輪郭を学ぶメディアとなる。また、創作されたころの歴史的背景も学べば、帝政ロシア以降の歴史もわかるからである。

文部科学省が経済財政諮問会議で提示した「遠山プラン(2001)」をきっかけに、社会人向けに大学開放を行い、高度で専門的な公開教育活動が展開されるようになった。この例として、大学の開放と生涯学習の推進を基本的使命に展開している明治大学の「リバティ・アカデミー」³⁰がある。ビジネスプログラム、語学プログラム、大学院博物館講座、資格実務講座、教養文化講座などと多数の講座をもつ。「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム(文科省)」に選定された講座も含む。その教養文化講座48の中に「オペラの楽しみ」という10回講座があった。「歌われる場面、時代背景、作曲者、原作等々についての興味、<略>、何作か選んで共に鑑賞しながらオペラの多様な楽しみを探りたい」³¹と講座趣旨に記載されていた。共に教室で鑑賞するには、オペラ映画かライブ映像オペラの活用となる。

劇場で鑑賞しなくても、DVDなどの映像を用いて観たい場面を何度でも観ることができる。学習にも利用できるようになったのである。

7. おわりに

ユネスコ第3回世界成人教育推進国際委員会(1965)において、ポール・ラングランは「教育とは、ひとりの人が初等・中等あるいは大学のいずれを問わず学校を卒業したからといって終了するものではなく、生涯を通して続くものである。<略>。教育の過程を中断することなしに継続することが必要である」³²と述べた。

生涯学習といえば、キャリアアップのためのリカ

レント教育が目立つ。しかし、余暇の充実のための趣味や娯楽の活動もあり、リバティ・アカデミーのような公開講座のほか、美術・演劇・舞踊・映画などと同様、オペラを鑑賞に行く場合もある。鑑賞には学ぶべきことが多様にあり、楽しみながら教養を高めることができる。自宅ならば、高齢になっても地方であっても、音楽鑑賞や映画鑑賞などとともにDVDでオペラ鑑賞ができる。

本稿では隣国ロシアのオペラ事情を考察し、治世者の意をくみ上演できるように微妙に演出を変え、国内外にオペラ作品を発信してきた歴史があったことを明らかにした。ただ、オペラは音楽や芝居による筋書きを楽しむだけではない。その作品から文化や歴史を学び、その演出から政治・経済などの国際情勢も感じうる国際理解のメディアとして、生涯にわたり利用することができることも検証した。それゆえ、生涯学習の一つとして、オペラ鑑賞の普及を提言するのである。

本稿では史実を台本にするロシア・オペラ4作品を調査した。ほかにも生涯学習に適するオペラ作品はあるのだろうか。選曲が課題として残った。

注

- ¹ 山本恒夫・浅井経子・渋谷英章『生涯学習論』（第3刷）文憲堂、2008年4月8日、2頁。
- ² 『中学校学習指導要領』文部科学省、平成20年3月告示、2頁。
- ³ 「レニングラード国立歌劇場オペラ」2007年日本公演、光藍社。
- ⁴ フランシス・マース『ロシア音楽史』森田稔・梅津紀雄・中田朱美訳、春秋社、2006年3月20日、169頁。
- ⁵ 川端香男里他『新版ロシアを知る事典』（第3刷）平凡社、2007年6月10日、706頁。
- ⁶ 『ロシア音楽史』同上、192頁。
- ⁷ 同上、28頁。
- ⁸ 同上、26頁。
- ⁹ 同上、36頁。
- ¹⁰ 同上、43頁。
- ¹¹ 同上、63頁。
- ¹² マーゴ・フォンテーン『バレエの魅力』（第2刷）、

-
- 湯河京子訳、新書館、1993年11月5日、172頁。
- ¹³ 『ロシア音楽史』同上、300頁。
 - ¹⁴ 同上、322頁。
 - ¹⁵ 同上、96頁。
 - ¹⁶ 安藤紀子『ゲルギエフ』（第1刷）東洋書館、2005年10月20日、27頁。
 - ¹⁷ 「外務省：最近の日露関係」
<<http://www.mofai/area/russa/kankei.html>>
(2007.8.29)
 - ¹⁸ 『新版ロシアを知る事典』同上、697頁。
 - ¹⁹ 同上、698頁。
 - ²⁰ 「マリイーンスキイ・オペラ 2008年公演、公演概略」http://www.japanarts.c.jp/html/2008_mariinsky_opera/abstracts.htm (2008.2.23)。
 - ²¹ 『ロシア音楽史』同上、136頁。
 - ²² 同上、136頁。
 - ²³ 同上、135頁。
 - ²⁴ 同上、136頁。
 - ²⁵ 同上、135頁。
 - ²⁶ 乾一字『ロシアの安全保障と国際関係特講（講義資料）』2008年、12頁。
 - ²⁷ 『日本経済新聞』2008年3月4日、13版、第6面、「ロシア新体制識者の見方」。
 - ²⁸ 袴田茂樹「復活した大国ロシアとどう向き合うか」『中央公論』2008年5月号、111頁。
 - ²⁹ 『日本経済新聞』2009年4月26日、12版、第30面、「殴州歌劇場に資金難の冷風」。
 - ³⁰ 岩永雅也『生涯学習論、現代社会と生涯学習』（改訂版第2刷）放送大学教育振興会、2007年2月20日、104頁。
 - ³¹ 「オペラの愉しみ」<https://academy.meiji.jp/shop/commodity_param/ctc/20/stc/0/cmc/09220010/backURL/+shop+main>(2009.11.23)
 - ³² 『現代社会と生涯学習』同上、14頁。

 参考資料

A (書物に関するもの)

- ・安藤紀子『ゲルギエフ』東洋書籍、(2005)。
- ・岩永雅也『生涯学習論、現代社会と生涯学習』放送大学教育振興会、(2007)。
- ・川端香男里他『新版ロシアを知る事典』平凡社、(2007)。
- ・フランシス・マース『ロシア音楽史』春秋社、(2006)。
- ・マーゴ・フォンテーン『バレエの魅力』新書館、(1993)。
- ・山本恒夫他『生涯学習論』文憲堂、(2008)。
- ・『中学校学習指導要領』文部科学省、(2008)。

B (ビデオ・DVDに関するもの)

- ・歌劇『イーゴリ公』DVD、プロヴァトーロフ指揮、キーロフ、ドリームライフ、(2007)
- ・歌劇『ボリース・ゴドゥノーフ』DVD、ネボリシーン指揮、ボリショイ、ドリームライフ、(2007)。

C (Webに関するもの)

- ・「オペラ公演予定」
<<http://www.jic-web.co.jp/pa/opr.html>>
(2008.1.4)。
- ・「オペラの愉しみ」
<https://academy.meiji.jp/shop/commodity_param/ctc/20/stc/0/cmc/09220010/backURL/+shop+main>(2009.11.23)。
- ・「外務省：最近の日露関係」
<<http://www.mofai/area/russa/kankei.html>>
(2007.8.29)。
- ・「統計局：社会生活基本調査、趣味・娯楽 60-1」
<<http://www.e-stat.go.jp>>(2009.10.11)
- ・「マリイーンスキイ・オペラ 2008 年公演、公演概略」
http://www.japanarts.c.jp/html/2008_mariinsky_opera/abstracts.htm (2008.2.23)。
- ・「ロシア文化フェスティバル」
<<http://www.russian-festival.net>>
(2008.6.21)。

D (その他のもの)

- ・「レニングラード国立歌劇場オペラ」2007 年日本公演、光藍社バンフレット。

(Received:December 31,2009)

(Issued in internet Edition:February 8,2010)